様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６２０
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０３９８６

研究課題名（和文）がん患者の主体性を育み活用できる外来看護師育成プログラム：普及性向上のための改善

研究課題名（英文）Education program for outpatient nurses for nursing practice empowering patients living with cancer: Improvements for program dissemination

研究代表者
佐藤　まゆみ（Sato, Mayumi）

順天堂大学・大学院医療看護学研究科・教授

研究者番号：１０２５１１９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,900,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的は、簡素化した外来看護師育成プログラムが、通常の現任教育と比べ、「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」のための実践力を高めるかを検証することである。プログラム適用群として介入群A（eラーニング学修後、外来で実践し、指導者と振り返る）と介入群B（eラーニング学修後、外来で実践する）を設定し、介入群Aと対照群、介入群Bと対照群で実践力と自己効力感の得点変化を比較した。両群ともにプログラム実施後に実践力得点が有意に増加し、対照群の得点変化と比して、その増加が有意に大きかった。本プログラムは、通常の現任教育と比べ、「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」のための実践力を高めると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
がん医療の現場が外来に移行している今日、外来看護師の能力開発は重要な課題であるが、外来がん看護の能力開発に特化した育成プログラムは少ない。本研究では、普及性を高めるためにオリジナルプログラムを簡素化した。そして、この簡素化プログラムが、通常の現任教育と比べ、「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」のための実践力を高めることを明らかにした。本プログラムは、“がんを抱えても自分はこのように生活したい”という患者の意思を大切にし、その実現に向けて患者が問題に取り組むことを支援できる外来看護師を育成する。人々の生活や価値観が多様化している中、本プログラムは人々のQOL向上に大きく貢献できるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to verify whether a simplified "Education Program for Outpatient Nurses for Nursing Practice Empowering Patients Living with Cancer" improves nursing practical abilities empowering patients living with cancer. Changes in practical ability scores and self-efficacy scores were compared between intervention group A (after e-learning, they practiced in outpatient setting and reflected the practice process with their instructor) and the control group, and between intervention group B (after e-learning, they practiced in outpatient setting) and the control group. Both groups showed a significant increase in practice ability scores after the program was implemented. And in both groups, the increase in practice ability scores was significantly greater than the change in the control group. Compared to in-service education for outpatient nurse, this program was considered to enhance practical abilities for "nursing practice that empower patients living with cancer".

研究分野：がん看護学

キーワード：がん看護　外来看護　主体性　エンパワーメント　外来看護師　育成プログラム　教育プログラム　eラーニング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## １．研究開始当初の背景

がん看護領域の外来看護師には、患者や家族が、がんから派生する様々な問題をうまく解決して自分らしく生活を送るための看護ケアを提供する役割が求められている。しかし、外来がん看護の現場は多忙を極めており、患者・家族への教育は、“効果的と思われる方法を患者に手短に教え込む”など、従来の医学モデルアプローチに基づく教育に陥りがちである。そこで、研究者らは、患者・家族の主体性を育み活かす看護実践を的確に遂行できる外来看護師を育成するための「外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のための外来看護師育成プログラム」を考案し、4 つの施設で試行を行った。試行の結果、試行版プログラムの有用性についての外来看護師の評価は、「着実に能力を獲得できる」等であり、外来看護師の指導者の評価は、「育成に必要な内容は網羅されている」等であった。また、外来看護師が実施したのべ 11 のサブプログラム(以下 SP）のうち 10（90.9%）の SP において、試行版プログラム実施前と比べ、実施後の実践力チェックリストの点数が増加した。さらに、外来看護師が実施していない 34 の SP のうち、プログラム実施後に点数が増加した SP が 16（47.1%）認められた。一方、試行版プログラムの施設での運用可能性についての指導者と看護管理者の評価は、「時間とマンパワーが確保できれば可能」「プログラムの実施方法をもう少し簡素化する」等であった。以上の結果より、試行版プログラムは、外来通院がん患者の主体性を育み活かす看護実践のための能力を育成する上で有用と考えられたが、施設内で活用されるためには、教育の質は維持しつつ最小の負担で実施できるように簡素化する必要があることが明らかになった。また、講義–研修–所属外来での実践という SP の構成のうち、講義だけでも能力が育成できる可能性が示唆された。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、考案した「外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のための外来看護師育成プログラム」を教育の質は維持しつつ最小の負担で実施できるように簡素化し、この簡素化プログラムが、通常の現任教育を比べて、「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」を行うための外来看護実践力を高めるかどうか検証することである。

## ３．研究の方法

### (1)簡素化プログラムの作成

先行研究の結果に基づき簡素化プログラムを作成し、簡素化プログラムの内容妥当性について、試行版プログラムを試行した4施設の指導者及び看護管理者、及び、上記以外のがん診療連携拠点病院の外来看護師と看護管理者、に聞き取り調査を実施する。聞き取り調査の結果に基づき修正を加え、簡素化プログラム（以下プログラム）を完成させる。

### (2) 検証研究の準備

文献検索の結果、「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」を測定するための適切な尺度を見出すことができなかったため、先行研究の結果を活用して尺度を作成する。また、各SPの「講義」及び「2つの資料」の部分をeラーニング教材として作成する。

### (3)検証研究の実施

<u>研究デザイン</u>：プログラムの適用によって「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」を行うための実践力及び自己効力感が高まるかどうかを検証する 2 群事前事後準実験デザインである。プログラムを適用する方法として、「e ラーニングによる学修を行い、その後所属外来で実践を行い、実践過程を指導者と振り返る群（介入群 A)」「e ラーニングによる学修を行い、その後講

義内容を意識して所属外来で独自に実践を行う群（介入群 B)」の 2 つを設定し、介入群 A と対照群（施設で行われる通常の現任教育のみをうける群)、介入群 B と対照群のそれぞれ 2 群を比較する。

介入方法：介入群 A は、①実践力チェックリストで実践力を評価し、学修する SP を選定、②e ラーニングで講義を視聴し、その後、講義の内容を意識しながら自分の所属する部署で実践を行う。③実践過程を記録し、指導者とともに振り返りを行う。介入群 B は、①実践力チェックリストで実践力を評価し、学修する SP を選定、②e ラーニングで講義を視聴し、その後、講義の内容を意識しながら自分の所属する部署で実践を行う。対照群は、施設で行われている通常の現任教育のみをうける。

対象者：本研究の対象者は、がん診療連携拠点病院に勤務し、自分の所属部署での外来看護がひととおり実践できるレベルの外来看護師及び介入群 A の指導者である看護師である。外来看護師の適格条件は、①自分の所属部署での外来看護がひととおり実践できる、②常勤か非常勤／パートタイム勤務かは問わない、③全 2 回の調査をうけることができる、であり、介入群 A の指導者の適格条件は、①外来での看護に精通している、②外来通院するがん患者の看護に精通している、③人を育てる視点（教育的な視点）を持っている、④介入 6 ヶ月後の調査をうけることができる、である。

本研究に必要なサンプルサイズを、G*power を用いて計算した結果（対応のない 2 群の平均値の差の検定：効果量 0.5、検出力 0.8、有意水準 0.05)、1 群あたり 64 名が必要であった。そこで、介入群 B と対照群は脱落率を 30%と考え 83 名確保する。介入群 A は現実的に協力の得られる数を見積もり、15 名の協力者を確保する。

対象者の割り付け方法は以下のとおりである。まず、介入群 A は、指導者を確保する必要があることから、機縁法を用いて研究協力依頼を行う。介入群 A の協力者が確保できたら、それらの協力者の所属病院を除く全国のがん診療連携拠点病院から、介入群 B と対照群への研究協力を依頼する病院を無作為に抽出し、研究依頼を行う。介入群 B と対照群は汚染を避けるために病院ごとに割り付ける。

調査項目とデータ収集方法：主要アウトカムは「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」を行うための実践力と「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」の実施における自己効力感である。副次的アウトカムは、「プログラムの実践状況」「プログラム実施の負担感及び施設研修への取り入れやすさ」である。すべての調査は Web 上で行う。プログラム実施期間は 6 ヶ月とする。

| | 開始時調査 | | | 終了後調査（開始から 6 ヶ月後） | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 介入群 A | 介入群 B | 対照群 | 介入群 A | 介入群 B | 対照群 | 介入群 A 指導者 |
| 属性調査 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ |
| 実践力/自己効力感調査 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 実践状況調査 | | | | ○ | ○ | | |
| 負担感調査 | | | | | | | ○ |

(4)検証研究の評価

対象者（学修者）の属性は、介入群 A と対照群、介入群 B と対照群で差の検定を行う。プログラムは実践力/自己効力感を獲得させるかについては、「実践力」「自己効力感」のデータ用いて、①介入群 A、介入群 B それぞれでプログラム前後の得点の差の検定を行う、また、②介入群 A と対照群、介入群 B と対照群で、プログラム実施前後の差について差の検定を行う。有意水準を 5%

未満とし、各変数の正規性を確認した上で実施する。「実践状況」「プログラム実施の負担感及び施設研修への取り入れやすさ」は介入群 A、介入群 B ごとに単純集計する。

## ４．研究成果

### (1) 簡素化プログラムの作成

先行研究に基づき修正した簡素化プログラムの内容妥当性について、試行版プログラムを試行した 4 施設の指導者及び看護管理者 8 名、それ以外のがん診療連携拠点病院の外来看護師及び看護管理者 4 名に対して聞き取り調査を行い、簡素化プログラムを完成させた。

プログラムの目的：がん患者の主体性を育み活かす看護実践ができる外来看護師を育成することである。プログラムの学修者：自分の所属する部署での外来看護がひととおり実践できる実践レベルの者で、目安としては外来勤務 2 年目以上の看護師である。プログラムで育成する実践力：①療養上の問題に対する患者の考えや思いの理解、②問題解決方法の獲得への支援と療養姿勢の後押し、③がん治療に伴って起こりうる副作用と自宅での対処方法についての説明、④外来診療における医師からの情報獲得支援、⑤外来における他職種連携による支援。プログラムの構成：①5 つ実践力に対応する 5 つの SP、②実践力チェックリスト、③2 つの資料、④記録用紙、で構成した。SP の構成：プログラムが実践力の育成をめざしていることから「講義」「研修」「実践」とした。「講義」はすべて e ラーニングによる学修とした。「研修」は学修者の状況によっては省略することも可能とした。「実践」は、所属する外来で業務と併行して実施し、その実践過程を記録して指導者とともに振り返り学修する方法とした。また「実践」を行う日数や患者数は学修者の経験や意向をふまえて設定し、到達目標が達成できれば終了とした。プログラムの実施方法：学修者はまず実践力チェックリストで「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」という点から現在の自己の実践力を評価し、学修する SP を選定する。e ラーニングシステムにアクセスして講義を視聴し、その後、講義の内容を踏まえながら所属する外来で業務と併行して実践を行う。実践過程を記録して指導者とともに振り返り学修する。選定した SP の学修がすべて修了した後に同チェックリストで実践力を再評価する。

### (2)検証研究の準備

先行研究において、がん診療連携拠点病院に所属する外来看護師 598 名を対象に、外来通院がん患者が主体性を発揮して生活することを支援する上で重要と考える外来看護実践について調査を行った。分析の結果、外来通院がん患者の主体性を活かして行う外来看護実践は 5 つの因子で構成され、この 5 つの因子を本プログラムで獲得をめざす 5 つの実践力とした。そこで、各 SP の内容を反映し、重要としながらも実施していると評価する程度が低い項目を抽出し、構成概念や信頼性係数を確認しながら尺度を作成した。作成した尺度は 1 因子 22 項目であり、全体のクロンバックα係数は 0.98 であった。先行研究データの二次利用については、研究代表者が所属する施設の倫理審査委員会の承認を得た。

また、各 SP の「講義」及び「2 つの資料」の部分を e ラーニング教材として作成した。e ラーニング教材は、外来看護師が効率よく視聴できるよう 10～15 分ごとにチャプターをいれた。

### (3)検証研究の実施と評価

#### ①対象者と対象者の属性

介入群 A 学修者：15 名、介入群 B：37 名、対照群 43 名から研究協力が得られ、そのうち、開始時調査と終了時調査の両方を完了した者である、介入群 A 学修者：12 名、介入群 B：34 名、対照群：36 名を分析対象者とした。介入群 A 指導者は 12 名から協力が得られ、指導をしていた学修者の研究協力辞退に伴い辞退となった者 1 名を除き 11 名を分析対象者とした。年齢、看護

師経験年数、外来看護師経験年数、主として担当している外来部署、最終学歴において、介入群Aと対照群、介入群Bと対照群に有意な差は認められなかった。

②介入群Aと対照群との比較

実践力得点において、介入群Aのプログラム実施前の平均得点は73.67(SD5.40)、実施後の平均得点は87.00(SD 6.82)で、有意な差が認められた（P=0.004）。自己効力感得点では、介入群Aのプログラム実施前の平均得点は4.92(SD1.50)、実施後の平均得点は6.58(SD1.31)で、有意な差が認められた（P=0.007）。

実践力得点において、介入群Aのプログラム実施前後の得点の差の平均は13.33(SD10.45)、対照群の研究期間前後の得点の差の平均は3.83(SD7.60)で、有意な差が認められた(P=0.007)。自己効力感得点では、介入群Aのプログラム実施前後の得点の差の平均は1.67(SD1.44)、対照群の研究期間前後の得点の差の平均は1.22(SD1.59)で、有意な差は認められなかった(P=0.344)。

③介入群Bと対照群との比較

実践力得点において、介入群Bのプログラム実施前の平均得点は70.06(SD10.41)、実施後の平均得点は85.50(SD 10.29)で、有意な差が認められた（P<0.001）。自己効力感得点では、介入群Bのプログラム実施前の平均得点は4.68(SD1.57)、実施後の平均得点は6.15(SD1.44)で、有意な差が認められた（P<0.001）。

実践力得点において、介入群Bのプログラム実施前後の得点の差の平均は15.44(SD10.88)、対照群の研究期間前後の得点の差の平均は 3.83(SD7.60)で、有意な差が認められた（P<0.01）。自己効力感得点では、介入群Bのプログラム実施前後の得点の差の平均は1.47(SD1.46)、対照群の研究期間前後の得点の差の平均は1.22(SD1.59)で、有意な差は認められなかった(P=0.495)。

④プログラムの実施状況

実施したSPは両群ともSP2が最も多かった。実施したSP数は、介入群Aは1つの者が8名（66.7%）で最多、介入群Bは5つの者が14名（41.2%）で最多であった。プログラムから学びを得られたかでは、「非常に／まあ学びを得られた」が介入群Aは11名（91.6%）、介入群Bは34名（100.0%）であった。プログラム終了後に「がん患者の主体性を育み活かして行う看護実践」にどの程度変化があったかでは、「非常に／まあ変化がある」が介入群Aは10名（83.3%）、介入群Bは31名（91.2%）であった。プログラムに取り組むことに非常に負担を感じた者は両群ともにいなかったが、「まあ負担を感じた」は、介入群Aは8名（66.7%）で、その理由は「日常業務との両立」「実施記録の記載」など、介入群Bは9名(26.5%）で、「日常業務との両立」「プログラムに沿ってできているか不安」などであった。

⑤プログラム実施の負担感及び施設研修への取り入れやすさ

介入群A指導者によるプログラム実施の負担感は、「あまり負担ではない」7名(63.6%)、「まあ負担である」4名(36.4%）であり、プログラムを施設研修にどの程度取り入れやすいかは、「非常に／まあ取り入れやすい」7名(63.6%)、「やや取り入れにくい」4名(36.4%）であった。

⑥最終評価

「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」を行うための実践力得点において、介入群A、介入群Bともにプログラム実施後は実施前と比して得点が有意に増加し、さらに、対照群の得点変化と比して、その増加が有意に大きかった。このことから、本プログラムは、通常の現任教育と比べ「がん患者の主体性を育み活かす看護実践」を行うための外来看護実践力を高めると考えられた。プログラム実施の負担感が介入群Aの学修者及び指導者のそれぞれ約4割に見られたことから、臨床への導入にあたっては、介入群B、即ち、eラーニングで講義を視聴し、その後、講義の内容を意識しながら自分の所属する部署で実践を行う方法が適していると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐藤まゆみ，片岡純，高山京子，大内美穂子，西脇可織，森本悦子，佐藤禮子，阿部恭子 |
| ２．発表標題<br>外来通院がん患者の主体性を活かして行う実践のための外来看護師育成プログラム：有用性及び施設での運用可能性の評価 |
| ３．学会等名<br>第35回日本がん看護学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 片岡　純<br>(Kataoka Jun)<br>(70259307) | 愛知県立大学・看護学部・教授<br>(23901) | |
| 研究分担者 | 森本　悦子<br>(Morimoto Etsuko)<br>(60305670) | 甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授<br>(34507) | |
| 研究分担者 | 阿部　恭子<br>(Abe Kyoko)<br>(00400820) | 東京医療保健大学・看護学部・教授<br>(32809) | |
| 研究分担者 | 高山　京子<br>(Takayama Kyoko)<br>(30461172) | 順天堂大学・医療看護学部・准教授<br>(32620) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 大内　美穂子<br>(Ouchi Mihoko)<br>(30614507) | 千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師<br>(22501) | |
| 研究分担者 | 佐藤　禮子<br>(Sato Reiko)<br>(90132240) | 東京通信大学・人間福祉学部・名誉教授<br>(32826) | |

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | 西脇　可織<br>(Nishiwaki Kaori) | | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|